

### 第8回

# 人間は英語を話すものである —— Next Generation TOEFL とは

あお くに まさ やす  
青谷正安

京都大学留学生センター

最近「中国経済が2025年までにアメリカを追い越す」と書いた“The Chinese Century”(O. Shenker 著, 2004年)という本が話題になりました。そうなれば、英語の勢力も今ほどではなくなるかもしれませんが、現時点では、Science Citation Indexの95%強が英語のjournalsであり、大切なjournalsの99%が英語だといわれています。さらに、サイエンスの先進諸国は圧倒的に印欧語圏ですから、科学研究で中国語がdominantになる日は簡単に来ないでしょう。それまでは「人間は英語を話すものである」との国際的認識が続くはずです。いずれにせよ、アメリカで学ぼうというのですから、英語力は当然ですね。



## TOEFL について

Test of English as a Foreign Language の略である TOEFL は、文字どおり英語を母語としない人のための英語力の試験で、Educational Testing Service (ETS) という New Jersey に本拠を置く非営利機関が作成・提供しています。ちなみに、TOEIC も ETS ですが、世界的には TOEFL のほうがはるかに有名で、日本と韓国 (TOEIC 受験者の 9 割だそうです) 以外では TOEIC はあまり知られていません。TOEFL は米語圏への留学希望者の英語力を測るスタンダードで、ここから留学のすべてが始まるといってもよい試験です。残念ながら日本人の平均スコアは、モンゴル、タイ、北朝鮮などと並んでアジア最低です。



## 過渡期の TOEFL

TOEFL は、アメリカでは今秋、日本では 2006 年から

Next Generation TOEFL として、format が変わります。いろいろな変化がありますが、最大の目玉は Speaking でしょう。現行の CBT TOEFL は、受験者のレベルに合わせて computer が問題の難易度を変えてくるという手の込んだもので、Listening, Structure (文法や表現), Reading, Writing の 4 セクションからなっています。これが Reading, Listening, Speaking, Writing に改変・改編され、Structure がなくなる代わりに Speaking が入るのです。また、たとえば Reading と Listening と Speaking を組み合わせるなど、統合的なアプローチが加わります。

現行の TOEFL の内容と勉強法については、僕の Web site (<http://aoitani.net/aotani/English/TOEFL.html>) で詳しく説明しています。よって、ここではおもに新 TOEFL について、現行の TOEFL との比較も交えて説明しましょう。ただ、僕も TOEFL 公式サイトの description (<http://www.ets.org/toefl/nextgen/description.html>) や Sample Questions (<http://www.ets.org/toefl/nextgen/samples/index.html>) および、ETS が行った関係者のための説明会の資料以外には、情報源がありません。京大で行った次世代 TOEFL のトライアルでも、Reading と Listening しかありませんでした。さらに、今後 format の詳細が改変される可能性もありますので、これらを承知のうえで読んでください。

なお、問題数や時間の最終決定はまだなされていません。全体構成の概要はここにもでています。

<http://www.ets.org/toefl/nextgen/integrate.html>

## ● Reading (3題, 60分)

三つの文章を読み各設問に答えます。一つだけを選ぶとは限りませんが、すべて多肢選択です。語彙のいい換え(文中の単語や連語と同意のもの)、指示語(thatの指すものなど)、内容と要点(筆者の意図、理由説明、おもな内容)、推断(文意から推察・判断できること)、文の挿入(与えられた文に最適挿入場所)に関する問題はCBT TOEFLと変わりませんが、新たに表を埋める問題ができました。例題から判断する限り、文章の内容や要点に合致するものの選別が、表埋め問題の主目的のようです。

## ● Listening (6題, 答えるのに20分:聞く時間は含まれません)

会話が二つ、講義が四つです。それぞれに設問が5, 6題つきます。現行TOEFLのような10秒強の短い会話は消えました。長い代わりにこれまで禁止だったメモ取りが許されます。ただし、問題のほとんどが趣旨や主要点や話者の意見・姿勢に関するものなので、詳細をすべて書き取る必要は皆無です。話の筋の理解で答えられる問題も多いですが、話者の本意・真意を問う新しいタイプの問題では「大人の聴解力」が求められます。

## ● Speaking (6題)

三つの違ったタイプの問題が各タイプ2問ずつです。一つ目は自分の経験や意見を述べるタイプで、例題は自分にとって大事であった講義について、また1年生が寮に住むことを義務づけるべきかどうかについて自分の意見を述べるというものです。出題は口頭でなされ、15秒の準備時間(preparation time)を経て45秒間しゃべります。二つ目のタイプでは、読む・聞く・話すの3技能が試されます。簡単な指示を聞いたあと45秒間で短い文を読み、続いて関連した講義や会話を聞いて、それらの情報をまとめる形で質問に答えます。質問は聞くだけで、書かれてはいません。問題のうち一つは大学全般、もう一つは講義などクラス内での活動に関するものだそうです。メモ取りは許されてはいますが、Listeningのセクションと違って短いので、それほど必要は感じられません。30秒の準備時間を経て60秒間しゃべります。最後のタイプは、聞く・話すのintegrationです。会話または講義を聞きなさいとのannouncementに続いて、メモ取りの許される短かめのListeningがあり、その後口頭でなされる指示に従って、内容をまとめたり自分の意見を述べたりします。準備は



## 恐怖のSpeaking

TOEFLのSpeakingは、公式サイトで発表もされ、実は数年前から知る人ぞ知る事実でした。しかし、その対策を講じていた日本人はほとんどいなかったと思います。そのせいか僕の周囲でも学生さんたちのあわてようはたいへんなもので、教員もいっしょになってあわてています。話す前の準備時間が短いので、まず頭で全体の作文をしてからoutputにもって行くのは絶対不可能です。話す時間も45秒とか60秒とかですから、考えながら自然に話す力がなければ、これはできません。そんななか、「英語で考えるくらいでないと、とてい本番では通用しないなあ」と嘆く僕より、もっと青い顔のアメリカ人教員がいます。

彼曰く、「本番まで行ったらたいしたものだ」。Sample Questionsをやらせてみたところ、本番前のマイク調整で秒殺が続出したそうです。何しろ「マイク調整をするから」とのこと、"Describe the city you live in."との指示がいきなり飛んでくるのですから。合掌…

20秒、話すのは60秒です。

## ● Writing (2題)

二つのタイプがあります。一つは読む・聞く・書くのコンビネーションで、最初に3分間で、学校に関係のあるトピックについて書かれたtextを読み、続いて同じトピックについての講義を聞きます、この間メモは自由に取れます。その後読み物と講義の関係などについての質問を聞き、答えを20分間で書きます。個人的意見を書くのではありません。理由はわかりませんが、150から225単語が適正なoutput量だそうです。講義のあいだtextは見られませんが、作文のときにはまたでできます。二つ目はだされた課題について自分の知識や経験に基づいて30分でエッセイを書くものです。「少なくとも300単語は書け」とETSはいつています。現行のWritingにそっくりです。

内容の具体例についてはSample Questionsを自分で見ていただきたいのですが、TOEICよりはるかに難しいのは一目瞭然。そこで今回は、TOEFL徹底攻略法です。

「お行きなさい」